

## 開講にあたって

メロドラマはもともと 19 世紀初頭、革命によって神と皇帝を失った混乱期のフランスで、道徳に従って社会を生き抜く姿をブルジョアジーに見せてくれる勧善懲悪劇として人気を博しました。20 世紀に入ると時代遅れになりましたが、ピーター・ブルックスは 1976 年の著作『メロドラマ的想像力』でこの演劇の一ジャンルを改めて取り上げ、真実は必ず明るみに出るという強い信念とそれを押しつける感覚的で派手な手法は 19 世紀以降の小説に受け継がれたと指摘して、ジャンルや時代を超えた大衆文化の想像力の分析へと道を開きました。それ以後、主にハリウッド映画の分野で研究が進み、メロドラマが同時代のアクチュアルな問題と結びついた実に多様な実践として演じられ、語られ、体験されてきたことが知られるようになりました。

しかし現在では、ブルックスとその後の研究の問題点も指摘されています。その一つに研究が欧米中心に偏ってきたことがあげられます。メロドラマの起源がフランス革命にあると繰り返し強調されてきましたが、20 世紀初頭に至るまでロシア正教と強く結びつきながら皇帝による専制体制が維持されたロシアでメロドラマがどのような運命をたどったのか、体系的な研究はまだ存在していません。ロシアにおけるメロドラマを、ジェンダー、階級、個人／家庭／社会の関係、舞台・映画・文学等の芸術やメディアといった論点から学ぶことは、そうしたバランスを修正するだけでなく、社会や文化のさらに多様な姿を明らかにしてくれるでしょう。

この講座のもう一つの特徴は、ロシアと同じように近代化を遅れて体験し、これまでのメロドラマ研究でやはり周縁的な存在とされてきたアジアの中から、日本・中国・インドとの比較を行うことです。もちろん、欧米との違いだけに目を向けて、国や地域独自のメロドラマ的想像力の存在を声高に叫ぶことが目的ではありません。重要なのは、欧米・ロシア・アジアの違いや似ている部分を確認することそのものではなく、差異や同一性を生み出す問題を共有することだと私たちは考えます。メロドラマはさまざまな形を取りながら大衆社会を生きる人々の想像力を提供してきました。この講座では、アジアとの比較を通じてロシアのメロドラマに親しむとともに、メロドラマが世界の経験のしかたをどのように形づくってきたのかという問題を皆さんと共有し、共に学ぶことを目指しています。

2021 年 10 月

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授

安達 大輔

## 開 講 日 程

| 日 程   |                  | 講 義 題 目  | 講 師                                      |
|-------|------------------|--|--|
| 第 1 回 | 10 月 4 日<br>(月)  | 19 世紀ロシアのメロドラマ                                   | 北海道大学<br>スラブ・ユーラシア研究センター<br>准教授<br>安達 大輔 |
| 第 2 回 | 10 月 8 日<br>(金)  | 「救国の妓女」幻想：<br>中国におけるメロドラマの系譜                     | 北海道大学大学院<br>文学研究院<br>准教授<br>田村 容子        |
| 第 3 回 | 10 月 11 日<br>(月) | バレエ『白鳥の湖』<br>悲劇からメロドラマへ                          | 上智大学外国語学部<br>日本学術振興会<br>特別研究員<br>斎藤 慶子   |
| 第 4 回 | 10 月 15 日<br>(金) | ソ連製メロドラマ映画と住宅                                    | 岡山大学大学院<br>社会文化科学研究科<br>准教授<br>本田 晃子     |
| 第 5 回 | 10 月 18 日<br>(月) | いつか王子様が？：<br>ドラマ「Made in Heaven」に見<br>る現代インド結婚事情 | 追手門学院大学<br>国際教養学部<br>准教授<br>小松 久恵        |
| 第 6 回 | 10 月 22 日<br>(金) | 越境するメロドラマ的想像力：<br>帝政期ロシアのメロドラマ映画<br>と新派映画の比較を通じて | 北海道大学大学院<br>文学研究院<br>准教授<br>小川 佐和子       |

※都合により日程等の一部を変更することがあります。



## 第1回 10月4日(月)

### 「19世紀ロシアのメロドラマ」

安達 大輔(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・准教授)

この講義では、ハッピーエンドをお約束とする19世紀初頭の古典メロドラマから、女性の奔放な身体を舞台とした悲劇を描き出す20世紀初頭のサイレント映画へという、ロシアのメロドラマ的想像力に起こった変化の一部を、三段階に分けて見てゆきます。

ロシアにおけるメロドラマの歴史を考える際にまず留意すべきことは、それがフランスから輸入されて大流行したのが1830年代だったということです。この時期本場フランスでは、ピクセレクールに代表され、ハッピーエンドで終わる勸善懲悪の筋をもつ第一期(古典メロドラマ)から、道徳よりも恐怖などのセンセーショナルな感情表現を重視し、時には悲劇的なエンディングも辞さない第二期へとメロドラマの作風に変化が起きていました。ユゴーやシュー、バルザックら人間と社会の暗部を描いた「暗黒小説」に熱狂していたロシアの作家たちは、そうしたフランス・ロマン主義の一部としてメロドラマを受け入れたのです。ロシア正教と結びついた皇帝による専制政治が行われていた状況下で、聖なるものの喪失に対する補償(ポスト宗教)というメロドラマの性格やそのブルジョア的な道徳観(世俗性)にリアリティを見い出すことは難しかったようにも思えますが、当時耳目を集めたのはメロドラマのセンセーショナルな側面でした。

しかし、ゴーゴリやレールモントフらロシアの作家たちのフランス・ロマン主義に対する熱狂が醒めるのも早く、それとともにメロドラマも、ロシアの生活が描かれていない外国からの輸入ものと厳しく批判されます。悲劇/喜劇という伝統的な分類に収まらない第三の演劇ジャンルとして「ドラマ」と同一視されることもあったメロドラマが、ナイーブな観客受けを狙った陳腐な演し物という意味合いを帯びるのもこの頃です。こうして19世紀ロシアにおけるメロドラマは、二手に分岐した道を進むことになりました。レパートリーの限られていた帝室劇場の舞台で重宝されフランスからの翻訳ものとしてジャンルを確立する一方、ロシア語による創作は発展せず、「メロドラマ的想像力」の否定的なイメージが舞台を飛び越えて小説などさまざまな領域で流通しはじめます。

1860年前後にはじまった大改革期はジェンダーを含む社会の激動の時代ですが、演劇界ではメロドラマの見直しが起こり、演劇を民衆に開かれたものにするためにその要素が取り込まれました。それまで排除されてきた女性の過剰な身体性が前景化されるとともに、権力によっては抑えきれない民衆の力のシンボルと読み替えられることで、従来はメロドラマと対立すると考えられてきた悲劇を取り入れながら、それを乗り越えるものとしてのメロドラマの読みが提示されたのです。こうして女性の身体を媒介にして、悲劇を内包しつつそれが(社会的正義の勝利という)ハッピーエンドに回収され、共感可能な道徳性を再び身にまとう新たなメロドラマ的想像力が立ち上がることになりました。

## 第2回 10月8日（金）

### 「救国の妓女」幻想：中国におけるメロドラマの系譜

田村 容子（北海道大学大学院文学研究院・准教授）

**メロドラマと中国演劇** この講義では、20世紀の中国伝統劇が、いかに外来の影響を受けて様式の上で変化したのか、そして表現される劇の内容もまた、時代に合わせていかなる変貌を遂げたのかを見ていきます。

「メロドラマ」の特徴として、しばしば劇的效果を高めるための伴奏音楽や、類型化された登場人物を用いることが指摘されます。人物の感情を音楽にのせて表現するメロドラマの形式は、じつは中国の伝統劇とも親和性が高いといえるでしょう。

19世紀から20世紀にかけて隆盛した中国の伝統劇である京劇は、歌唱と伴奏の入った音楽劇です。俳優は、型のある演技を通して人物を表現しますが、その役柄は類型化されており、善玉・悪玉などが扮装によってわかりやすく示されます。

**「救国の妓女」と『椿姫』** キーワードとなる「救国の妓女」とは、中国のメロドラマの系譜をたどるとき、幾度となく浮かび上がってくるヒロインのイメージです。たとえば、1909年に上演された『二十世紀新茶花』という作品では、苦界に身を沈めた妓女の新茶花が、若き将校・陳少美との仲を陳の父に引き裂かれた後、敵軍の元帥から地図を盗み出して陳に軍功を与え、結ばれるという筋書きが演じられました。

ヒロインの「新茶花」は、1899年に中国で翻訳された『巴黎茶花女遺事』、すなわち『椿姫』の影響下に生まれたキャラクターです。中華民国成立という現実のドラマとリンクし、革命、ジャーナリズム、メロドラマ、西洋式劇場、新式舞台装置、伝統劇の筋立てといった各種の要素を結合したこの演目は、『椿姫』の翻訳劇をしのぐ人気を博し、ローカル化された自由恋愛の物語という側面もそなえていました。

**「妓女」イメージの反転と変遷** 中国文学において、「妓女」という言葉には、国を亡ぼすイメージがつきまどってきました。晩唐の詩人・杜牧の七言詩「秦淮に泊す」に、「商女は知らず亡国の恨み 江を隔てて猶お唱う後庭花」という有名な句があります。この詩は、亡国の曲をそれと知らずに歌い興じる「商女」、すなわち妓女の姿を詠んだものとして、国家の存亡と妓女を対置するひとつの典型となり、後世においてもしばしば引用されました。

やがて「亡国」のイメージを反転させた、「救国の妓女」という像が作り出されます。20世紀以降の中国において、『椿姫』や「新茶花」のように、伝統的な家父長制度との間に葛藤をもたらす女性像と、国家のアイデンティティがどのように結びつけられ、メロドラマを作り上げてきたのか、さまざまな作品から読み解いてみたいと思います。

### 第3回 10月11日（月）

#### 「バレエ『白鳥の湖』 悲劇からメロドラマへ」

齋藤 慶子（上智大学外国語学部/日本学術振興会・特別研究員）

バレエの代表的作品といえど？と聞かれたら、『白鳥の湖』を思い浮かべる人は少なくないのではないのでしょうか。チャイコフスキーの有名な曲に合わせて展開される美しい踊りの数々は、19世紀末ロシアにおける誕生から現代に至るまで、観客の心を惹きつけてやみません。オデット姫とジークフリード王子が愛の力で悪魔ロットバルトの呪いを破り、二人は幸せに結ばれる、というまさにメロドラマティックなストーリーは、多くの観客がもっともよく知っているものでしょう。しかしながら、現在観ているのはあくまでもソ連時代の変革を経たあとの姿でしかありません。本講義では、もとは主人公たちが湖に身を投げるといふ悲劇的な結末だった『白鳥の湖』がメロドラマに成り代わった過程をご紹介します。

帝政時代には皇帝を頂点とする封建的な社会体制を維持していたロシアは、1917年の革命を経て労働者を中心とする体制に生まれ変わります。ソ連時代の文化には、新しい社会を支える新しい人民を育てるという使命が課されました。その際、物事の善悪をはっきりと示すというメロドラマのひとつの特徴が有用となりました。バレエの分野も無縁ではなく、新しい作品ばかりか、『白鳥の湖』のような古典作品にも大胆な改定が加えられていきました。ストーリーラインにおいて社会主義的な側面が反映されただけでなく、踊り方やマイム、主人公たちの人物造形にもその範囲はおよびました。ロットバルトの娘オディールが発狂するというメロドラマ映画の影響がうかがえるような改作もあれば（1920年、ゴルスキー振付）、ジークフリードの思慕の対象がオデット姫ではなく動物の白鳥そのものであるという（1933年、ワガノワ振付）、今では驚いてしまうような演出も20世紀の前半に登場していました。

『白鳥の湖』の改作は20世紀半ばには全国規模で展開され、様々な試みが行われました。じつは、日本で上演されている『白鳥の湖』にも少なからずその影響は及んでいます。ソ連の専門家が日本で初めて『白鳥の湖』全幕上演を行った事例として、1963年のチャイコフスキー記念東京バレエ学校の公演が挙げられますが、これはまさにソ連の20世紀半ばの成果が日本にもたらされたものでした。本講義では、その後日本独自の美学と絡み合いながら、ソ連の『白鳥の湖』の演出の一部が継承されている可能性がうかがわれる例について最後に言及したいと思います。

## 第4回 10月15日（金）

### 「ソ連製メロドラマ映画と住宅」

本田 晃子（岡山大学大学院社会文化科学研究科・准教授）

メロドラマの主要な舞台——それはもちろん住宅です。しかし十月革命以降、ソ連では従来の意味での「家」は否定されました。社会主義のイデオロギーの下では、それは経済的負担によって労働者を隷属化する要因であり、社会よりも自らの家族を優先するエゴイズムや、女性を社会から切り離す封建的家父長制の温床とみなされたのです。

それでは、「反・家」を掲げたソ連政権によって生み出された住宅とは、どのようなものであったのでしょうか。たとえば1920年代から1930年代にかけて、ソ連では家族ではなく労働者の共同体（コミュニオン）のための集合住宅が実験的に建設されました。他方多くの都市住民は、深刻な住宅難のために、本人の意志とは無関係に共同生活を強いられました。彼らが住んだのは、革命前の貴族やブルジョワの邸宅を改装した、「コムナルカ」と呼ばれる集合住宅です。政府によって接収されたこれらの邸宅は、ベニヤ板などで小さな部屋に区切られ、そこに一家族が押し込まれました。台所や浴室は共有でしたが、住人の数に対してこれらの設備は貧弱であることが多く、しばしば住民間の諍いの種となりました。ただ一方で、コムナルカは映画に格好の舞台を提供もしました。全く異なる出自や社会階層の人々が、互いに衝突しながら共に生活するコムナルカの空間は、メロドラマにうってつけだったのです。

しかしスターリンの五カ年計画や第二次大戦を経る中で、「家」や家族の位置づけは大きく変化します。ソ連の住宅の歴史の一大転換点となったのが、ニキータ・フルシチョフの登場でした。彼はスターリン時代の住宅政策を批判し、家族単位の集合住宅の大量生産・大量供給を自らの政策の筆頭に掲げました。そして実際フルシチョフ時代には、日本でいうところの「団地」に相当する、「フルシチョーフカ」と呼ばれる鉄筋コンクリート造の集合住宅が次々に建設され、ソ連全土の景観を一変させました。けれどもその一方で、これらの住宅は当初の社会主義住宅の理念をほとんど失って、西側諸国の団地と大差のないものになってしまいました。これらフルシチョーフカで展開されるメロドラマも、「ソ連らしさ」を失って、家族間の葛藤を主題とする、西側と同じような内容の作品が増えていきました。本講義では、このようなソ連の住宅史を背景に物語が展開する、ウラジーミル・メニシヨフ（1939-2021）の映画『モスクワは涙を信じない』（1979年）を中心に取り上げ、ソ連のメロドラマ映画の中で住宅がどのように描かれ、どのような役割を演じてきたのかを分析したいと思います。

## 第5回 10月18日（月）

「いつか王子様が？：ドラマ「Made in Heaven」に見る現代インド結婚事情」

小松 久恵（追手門学院大学国際教養学部・准教授）

インドが映画大国だと聞いたことがありますか？インドで1年間に制作される映画の本数は2000本近く、ほぼ毎週のように新作が封切られており、これは世界一の多さだとされてきました。家族そろって楽しむことができる勸善懲悪のストーリーだけでなく、映画で使用された音楽やダンス、豪華なファッション、欧米諸国を中心とする海外ロケ地等は人々を魅了し、インド社会に非常に大きな影響を与えます。インドにおいて、映画は娯楽の中心だといえるでしょう。一方テレビドラマは、もう少し身近な存在です。言い換えるなら「庶民的」だと言っても良いかもしれません。代表的なテレビドラマは、昼間に主婦層を対象として放映される「嫁姑モノ」であり、家族間の愛憎物語がシリーズ化されて短時間の連続ドラマとして放映されています。もっともそのテレビドラマが、昨今のインターネットの発展をうけ、変化しつつあります。

今回紹介する『Made in Heaven』（2019年）には、その変化の兆しが非常によく表れています。Amazon オリジナルのこのドラマは、監督俳優ともに映画界の第一人者を起用しながら、映画では描かれることが少ない同性愛や不倫などにも踏み込み、性描写もあからさまです。1話が約50分、9話で編成されており、ウェディング・プランナーの男女二人を主人公にインドで急成長中のブライダル業界が舞台となっていますが、ドラマには絢爛豪華な式の様子だけでなく、結婚にいたるまでの新郎新婦やその家族、そしてプランナーたちの人生が描かれます。

インドにおいて結婚とは「個人」ではなく、「一族」の問題です。結婚し、男児を出産することが「良きインド女性」に課された義務であり、そして娘をそこに導くことが両親はじめ親族の義務です。ドラマでは、女性たちは王子様を待ちます。ある者は戦略を練り、自分を磨き上げ、またある者は両親の言うがままに自我を殺して。けれど王子様と結ばれるためには、さらなる難関があります。女性たち（とその親族）は多額の持参金を準備し、非処女であることを隠し、相手にふさわしい星の巡りを提示しなければなりません。また、せっかく見つかった王子様が、理想通りではない場合もあります。それに対してある者は堂々と反旗を翻しますが、ある者は家のために口と心を閉ざすことを選びます。

この講座ではまず、現代インドにおける女性をめぐる社会問題を、特に結婚事情を軸にして解説します。後半では、それらの問題がテレビドラマ『Made in Heaven』においてどのように描かれているのか、映像を見ながら確認します。そしてドラマを通して今後のインド社会のありようについて、ひいては日本社会のありようについて、一緒に考えてみましょう。

## 第6回 10月22日（金）

「越境するメロドラマ的想像力：

帝政期ロシアのメロドラマ映画と新派映画の比較を通じて」

小川 佐和子（北海道大学大学院文学研究院・准教授）

メロドラマというジャンルおよび過剰な情動性をもたらすモードは、20世紀の新たな大衆娯楽である映画で、世界的にも、帝政期のロシアにおいても隆盛しました。ここでのメロドラマ映画とは、近代化に伴うさまざまな新しい変化、とりわけ危険や苦難が、本来のメロドラマ演劇における「悪役」のメタファーとして機能するという物語構造を持ちます。初期のメロドラマ映画では、革命や戦争のイデオロギーがスペクタクル性と結びつくこともあれば、都市化や産業化がショック作用を伴う「悪」として表象されることもありました。世紀末から20世紀初頭のロシア社会では、急速な、しかし遅れた近代化が不安を生み、都市化と産業化が、古い階級制度の崩壊と女性の自由の増大を引き起こしました。

本講義の前半では、帝政期ロシア映画に顕著に見られる、こうした「モダニティ」と関わるメロドラマ群を考えていきます。そこでは、女性の近代化によって登場した、経済的・性的に解放された女性イメージと抑圧された女性イメージの拮抗や、家父長制との葛藤、階級格差をもたらす犯罪といった典型的なメロドラマの主題が、日常を取り巻く物語としてスクリーンに現れました。

後半では、本公開講座の全体趣旨に即して同時代の日本映画を比較対象にし、新派映画へ視点を移していきます。帝政期ロシア映画の受容を確認し、メロドラマと同様に従来は揶揄的に「お涙頂戴もの」と呼ばれてきた新派映画の情動的な特徴を考えます。

大正時代、日本の映画会社は、ロシアの古典小説や戯曲をもとに映画を製作することがありました。これらの映画は、「旧派映画」（後の「時代劇」を指す）に対して、「新派映画」という類型にくくられます。新派映画とは、女性を封建社会の犠牲者として描いた通俗的な悲劇であり、この点で同時期のロシア映画と共通項を持っています。

日本映画史上に刻まれた新派映画は、レフ・トルストイの『復活』や『生ける屍』などロシア文芸の映画化です。前者は『カチューシャ』という邦題で1914年に、後者は1918年に日活向島が映画化しました。舞台や流行歌でも一世を風靡した『カチューシャ』人気にあやかって、映画界では『復活』の主人公ネフリュードフが、なんと日本にまでやってくるという奇妙な続編および続々編も製作されました。『カチューシャ』シリーズ以後も、川口松太郎脚色・溝口健二監督の新派映画『愛怨映』としてさらに翻案は続きます。

これらの翻案と受容をふまえて、ロシアと日本のメロドラマ的想像力の比較という観点から考察し、このような、越境性かつ諸芸術・娯楽ジャンルの文化的混淆性こそがメロドラマの特性であることを考えてゆきます。



## 読書案内：おすすめ図書リスト

### ➤ メロドラマ研究（一般）

1. ピーター・ブルックス著（四方田犬彦・木村慧子訳）『メロドラマ的想像力』産業図書、2002年
2. ジャン=マリ・トマソー著（中條忍訳）『メロドラマ：フランスの大衆文化』晶文社、1991年
3. ジョン・マーサー、マーティン・シングラー著（中村秀之・河野真理江訳）『メロドラマ映画を学ぶ：ジャンル・スタイル・感性』フィルムアート社、2013年
4. Louise McReynolds and Joan Neuberger (eds.), *Imitations of Life: Two Centuries of Melodrama in Russia* (Duke University Press, 2002)
5. 岩本憲児編『家族の肖像：ホームドラマとメロドラマ』森話社、2007年
6. 河野真理江著『日本の「メロドラマ」映画：撮影所時代のジャンルと作品』森話社、2021年

### ➤ 講義関連（講師が執筆したもの）

1. [Адаму Д. Гоголь и мелодрама \(к постановке проблемы\) // Філологічні науки. №31. 2019. С. 5-11](#)（ロシア語論文：安達大輔「ゴゴリとメロドラマ（問題設定に向けて）」）
2. 田村容子「「救国の妓女」を描く中国映画：社会主義文化における女性の身体と国家の想像」 越野剛・高山陽子編著『紅い戦争のメモリー・スケープ：旧ソ連・東欧・中国・ベトナム』北海道大学出版会、2019年、95-121頁
3. 斎藤慶子著『「バレエ大国」日本の夜明け：チャイコフスキー記念東京バレエ学校 1960-1964』文藝春秋企画出版部、2019年
4. 本田晃子「革命と住宅」第1-5回（連載継続中）『ゲンロンβ』57・58・60・61・62号、2021年
5. 小松久恵「近現代のヒンディー文学と女性」『インド文化事典』丸善出版、2018年、128-129頁
6. 小川佐和子著『映画の胎動：1910年代の比較映画史』人文書院、2016年

## 公開講座開講状況

| 回  | 年            | 講義内容                               |
|----|--------------|------------------------------------|
| 1  | 昭和 61 (1986) | ロシア(ソ連)・東欧社会と日本                    |
| 2  | 62 (1987)    | 変貌するソ連・東欧社会                        |
| 3  | 63 (1988)    | ゴルバチョフのペレストロイカ                     |
| 4  | 平成 元 (1989)  | 岐路に立つペレストロイカ                       |
| 5  | 2 (1990)     | 燃える東欧: 変革の軌跡とその将来                  |
| 6  | 3 (1991)     | ソ連・東欧圏の崩壊: 噴き出した民族・地域主義と改革の行方      |
| 7  | 4 (1992)     | ソ連邦の解体とユーラシア新秩序の模索                 |
| 8  | 5 (1993)     | 新生ロシアの一周年 - ロシアはどこへ                |
| 9  | 6 (1994)     | ロシア極東への視座 - 隣人を知ろう -               |
| 10 | 7 (1995)     | 地域からの東欧史 - 国家と民族を越えるもの -           |
| 11 | 8 (1996)     | 中央アジアの世界 ~シルクロードから現代へ~             |
| 12 | 9 (1997)     | ロシア文化の新しい世界                        |
| 13 | 10 (1998)    | 動き出す日露関係                           |
| 14 | 11 (1999)    | 北方ユーラシアの開発と環境                      |
| 15 | 12 (2000)    | 新千年紀を迎えたユーラシア、体制転換10年              |
| 16 | 13 (2001)    | 声なき者の復権: スラブ・ユーラシア圏における民族と歴史       |
| 17 | 14 (2002)    | 米国同時多発テロ後のユーラシア: 国際関係とイスラーム        |
| 18 | 15 (2003)    | サンクト・ペテルブルグ300年の歴史と文化              |
| 19 | 16 (2004)    | ロシアを見た日本人・日本を見たロシア人                |
| 20 | 17 (2005)    | ユーラシアの国境問題を考える                     |
| 21 | 18 (2006)    | 多様性と可能性のコーカサス: 民族紛争を超えて            |
| 22 | 19 (2007)    | 拡大する東欧                             |
| 23 | 20 (2008)    | 現代ロシアをめぐる7つの問い                     |
| 24 | 21 (2009)    | 世紀を超えて: 東欧革命後の20年を振り返る             |
| 25 | 22 (2010)    | 地域大国比較の試み - ロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか? |
| 26 | 23 (2011)    | スラブ・ユーラシアで躍動する人々                   |
| 27 | 24 (2012)    | ユーラシアの自然と環境は誰が守るのか                 |
| 28 | 25 (2013)    | ユーラシアの現代と宗教                        |
| 29 | 26 (2014)    | 記憶の中のユーラシア                         |
| 30 | 27 (2015)    | 動乱のユーラシア: 燃え上がる紛争・揺れ動く政治経済         |
| 31 | 28 (2016)    | スラブ・ユーラシア社会におけるジェンダーの諸相            |
| 32 | 29 (2017)    | 境界地域から北東アジア国際関係を考える                |
| 33 | 30 (2018)    | ロシアと北極のフロンティア: 開発の可能性と課題           |
| 34 | 31 (2019)    | 再読・再発見: スラブ・ユーラシア地域の古典文学と現代        |

【前回開講内容】

第1回 5月10日(金)

宇山 智彦 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授)

「カザフ文学とイスラーム世界：近代遊牧社会にとっての古典とは何か」

第2回 5月13日(月)

望月 哲男 (北海道大学名誉教授/中央学院大学教養学部教授)

「トルストイ『戦争と平和』の戦争観・歴史観をめぐって」

第3回 5月17日(金)

安達 大輔 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授)

「ゴゴリの手：『鼻』から「手」を考える」

第4回 5月20日(月)

ブルナ・ルカーシュ (実践女子大学文学部国文学科准教授)

「K・チャペックの『ロボット』を読み直す」

第5回 5月24日(金)

三谷 恵子 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

「ユーゴスラヴィアとポスト・ユーゴスラヴィアの文学—多文化空間の語り部たち」

第6回 5月27日(月)

小椋 彩 (東洋大学文学部日本文学文化学科助教)

「19世紀文学のポストモダンの再読とその後：プルス『人形』とトカルチュク『人形と真珠』」

第7回 5月31日(金)

野町 素己 (北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター教授)

「「方言文学」から「古典文学」へ：スラブ系少数民族文学再考」